ミナミクロダイ親魚養成

藤本　裕・金城武光・金城盛徳

はじめに

ハマフエフキ同様、本報告では親魚養成について述べる。

1　方　法

昭和58年9月21日から翌年2月14日にかけて、羽地、塩屋より親魚を購入した。羽地では小型マス網漁獲物、延縄漁獲物並びに養殖魚各々11、25、8尾の合計44尾、塩屋では養殖魚101尾を購入した。当センターまでの輸送方法、餌料等はハマフエフキと同様に行なった。親魚飼育は、当初水槽3面で最終的には2面となった。

2　結果及び考察

養成期間中の水温はハマフエフキとほぼ同様である。

羽地で購入した小型マス網漁獲物は魚体にスレ等の損傷が激しく、ひんぱんに薬浴を行なったが約1ケ月後には2尾の生残となった。また塩屋で購入した養殖魚もスレ等が認められ3ケ月後には約半数が斃死した。その他の購入魚には斃死はなく昭和59年3月末日で約70尾の親魚を養成中である。

これらの内、産卵が認められたのは昭和59年1月21日に羽地で購入した養殖魚だけで、水槽収容後5日目（1月26日）にごく少数の卵が確認された。その後3月17日までの間に11回の産卵が確認され、その内、計量できる程度の産卵があったのは5回で37～111ℓであった。またそれらの浮上卵率は77～90％であったが多油球卵が50％以上であった。